第 70 回国際理解・国際協力のための高校生の主張コンクール東京都大会 銀賞

筑波大学附属高等学校 2 年
三浦 愛紗美

課題②
本次期国連総会において、あなたが一般討論演説を発表するとしたら。

副題
「着物」と「鎧」

皆さんは日本の「着物」をご存じでしょうか。着物は日本の伝統的な衣装です。私の母の実家が京都で呉服業を営んでいることもあり、幼い頃から私は着物が大好きで、今でもお正月などには必ず着物を着ています。着物はとても美しく、海外からの観光客にも人気があると聞きます。一方で着物は、大股で歩いたり走ったりする動きには不向きで、決して活動的な服とは言えません。この観点に基づけば、着物は機能的な衣装ではない、と見做されるかもしれません。

それでは、着物は美しいだけで合理性に欠ける衣装でしょうか。私はそうは思いません。私は、着物は美しさとともに、本質的な合理性、そして、明確な理念をもった衣装だと考えます。そのように考える背景には、曾祖父や祖父母の実地体験と言葉があります。

1945 年までの日本は、軍部が強大な力を持ち、軍人が首相になってしまうような国でした。その日本において、私の曾祖父や祖父母や太平洋戦争を実際に経験しています。曾祖父たちは、頭上にある B29 爆撃機の編隊、その B29 に対抗するための戦闘機用燃料にと期待された松根油の採取、広島に落とされた原子爆弾が放った閃光、常に死と隣り合わせだった太平洋戦争終結後の満州からの引き揚げ、そして、満州からシベリアへの抑留などを、実際に見たり、自ら体験したりしました。

戦争の時代に、曾祖父たちは着物を着ることなどできませんでした。着物が贅沢品とされていたこともありますが、何よりも、いつ空襲や機銃掃射があるかわからない時に、走りにくい着物を着ていては逃げ遅れてしまいます。つまり着物は、平和で安心して暮らせる社会においてのみ着用できる衣装と言えるのです。当時も呉服業を営んでいた曾祖父は戦争の時代が終わった後に、着物は文字どおり和の服、平和の服だ、人々が安心して着物を着られる世の中は平和な世の中だ、と常々話していたそうです。その意味において着物は、平和な暮らしという、私たちにとって本質的な合理性を持つ状況を前提に着用される衣装なのです。

悲しいことに、今この瞬間も、世界の様々な場所で戦争や紛争が起きています。ニュースにはしばしば、現代の「鎧」ともいえる防弾服を身に着けた兵士の姿が登場し、軍人のみならず民間人の犠牲の様子が伝えられます。爆弾を搭載したドローンやミサイルの直撃を受けたら、いくら走りやすく活動的な服を、さらには防弾服を着ていても助かる見込みはありません。もしそれらの兵器に核弾

頭が搭載されていたら、着弾地から離れた場所にいる人たちであっても助かる見込みはないでしょう。

そこで、世界中の政治家の方々に提案です。

いくら防弾服を着ていても、爆弾やミサイルが近くに落ちれば身を守ることはできません。同時に、いくら国家が重武装をしても、AI テクノロジーが究極の次元まで進化した現代の高性能で破壊力が強い兵器による相互応酬がなされれば、被害は甚大なものになります。ましてや、万一核兵器が使用されれば、使用した国を含む世界全体が終わりを迎えることになります。現代においては、人も国家も、攻撃のみならず防御であろうと、その軍事的機能を高めるだけでは、最終的に自らを守ることはできないのです。

このような現代においては、争いではもはや勝者は生まれません。それならば、人も国家も、重たい「鎧」を脱いで、無防備な「着物」を着てみませんか。相手も自分も、「着物」を着ている状態では戦いなどできません。自らを危険にさらす脅威が無いその状態で、お互い徹底的に議論を尽くしてみませんか。

平和は机上の空論でも幻想でもなく、私たち人類が存続していくために必須の条件です。1 万発を超える核弾頭は、世界を滅ぼすのに十分すぎる破壊力を有しています。そのような現代の世界は、20 万年以上におよぶ私たちホモ・サピエンスの歴史に終止符を打ちかねないほど危機的な状況にあるとも言えるのですから。

ご清聴ありがとうございました。